

本質と知識

井上 颯樹 (Satsuki Inoue)¹・近藤 雅熙 (Masaki Kondo)¹・鄒 宏鑫
(Hongxin Zou)¹・村田 龍翼 (Ryusuke Murata)²

¹千葉大学大学院・²名古屋大学大学院

我々は多くのことを知っている。たとえば、日本の首都が東京であるということや、自転車の乗り方、自分たちの両親、そして、赤色とはどのような色であるのかについて知っているだろう。加えて我々は、たとえば、水が H_2O であるということが必然的であること、ソクラテスが哲学者でなかった可能性があるということ、ソクラテスが哲学者であることが偶然的であるということ、そしてソクラテスにとって人間であるということが本質的であるということを知っているように思われる。このように我々は、何が必然である、可能である、偶然的である、本質的であるということについても知識を持っているように思われる。このように、必然性や可能性などの言明をいかにして我々は知るに至るのかを問う分野は、現代の認識論では、様相認識論 (epistemology of modality) と呼ばれており、近年活発な議論が行われている。

様相認識論において、P という様相的内容を持つ命題について我々が知っていると言える条件は何かという問題に対して、多くの論者が多様な回答を投じてきた (Yablo 1993; Chalmers 2002; Williamson 2007; Biggs 2011; Lowe 2012)。そのなかで、本発表で我々が注目するのは、様相的知識に関する反事実条件文に基づくアプローチと、本質 (essence) の把握によるアプローチの対立であり、とりわけ、本質主義にもとづく後者のアプローチである。第一に、本質主義によれば、ある様相的命題 P について我々が知っているのは、我々が P に関する本質的知識を持っているからである。特に、E. J. Lowe が提示する本質主義にもとづく様相的知識の説明によれば、様相的知識は本質的知識から説明される。本質的知識は、ある実体の本質を表現する実在的定義 (real definition) の把握であり、実在的定義の把握はある種の命題の理解 (understanding) として説明される。

しかしながら、命題の理解は認識論的に重要な論点を構成していると考えられるにもかかわらず、この点に関して Lowe 自身はそれ以上の説明をあまり行っていない。そのため、ここでの本質主義にもとづくアプローチが認識論的な適切さをどれほど持ち得るのか、という問いに応答する、という課題が新たに生じているように思われる。

以上の背景に基づき、本発表は以下のような形式をとる。第一に、様相的知識を我々はいかにして獲得するのかということについてのいくつかの代表的な立場を確認する。とりわけ、反事実条件文に基づき様相的知識の獲得を説明する T. Williamson のアプローチを取り上げ、それが一定の説得力を持つことを確認する (§ 1)。

次に、反事実条件文によるアプローチへの反論を確認する。ここでは、様相的知識に関する本質主義的なアプローチの支持者からの反論が提示される。簡潔に言えばそれは、形而上学的必然性に関する知識を反事実条件文に基づくアプローチはうまく処理でき

ないというものである。そして、本質主義的なアプローチがこの反論を解決し得ることを見る (§2)。

続いて、本質主義的なアプローチが真に様相的知識に関する適切な説明を与えているのか否かを批判的に検討する。ここで問題になるのは、本質的知識の把握、あるいは理解の観点から様相的知識についての説明を与えようとする本質主義者たちの論証である。特に、あることについて把握している、あるいは理解しているということは何を意味するのか、という論点に対して、認識論的な枠組みの観点から本質主義者たちのアプローチを再評価することを目指す。より具体的には、本質主義者たちが依拠する、本質の把握及び理解に関する説明は認識論的観点から見て不十分であり、再考の余地があることを指摘する (§3)。

以上を踏まえ、我々は様相的知識の獲得に関する新しい提案を提示することを試みる。ここで我々は、二つの有力な戦略を提示するつもりである。一つ目の戦略は、本質の把握及び理解についての説明を改訂することを通して、本質主義的なアプローチを立て直すというものである。二つ目は、様相的知識に関する Lowe のアプローチを棄却し、別のアプローチを採用するというものである。とりわけ本発表で我々は、様相的知識の獲得に関するアブダクションにもとづいた説明に見込みがあることを指摘する (§4)。

最後に、本発表の総括を行う。ここでは、先に提示した我々の提案への潜在的な懸念を取り上げるとともに、今後の見通しについて簡潔に示す。

【参考文献】

Biggs, Stephen. (2011). Abduction and Modality. *Philosophy and Phenomenological Research*, 83: 283-326.

Chalmers, David. (2002). Does Conceivability Entail Possibility. In J. Hawthorne & T. Gendler (Eds.), *Conceivability and Possibility*. Oxford: Oxford University Press: 145-200.

Lowe, E. J. (2012). What Is the Source of Our Knowledge of Modal Truths, *Mind*, 121(484): 919-950.

Williamson, Timothy. (2007). *The Philosophy of Philosophy*, Malden, MA: Wiley-Blackwell.

Yablo, Stephen. (1993). Is Conceivability a Guide to Possibility? *Philosophy and Phenomenological Research*, 53: 1-42.